

鹿児島の昆虫40

霧島の春の昆虫

昆虫担当 金井 賢一

昆虫の中には春にしか成虫が姿を見せない種類があります。チョウではツマキチョウやコツバメなどがあり、春の妖精 = スプリング・エフェメラルと呼ばれます。スギタニルリシジミもその一種です。霧島での詳細な分布については、まだは

っきりと解明されておらず、私は4月1日に矢岳山腹の大幡沢入り口、夷守岳山腹の登山



道入り口で確認しました。まだまだたくさんの場所を調べなければなりませんが、4月中・下旬には姿を消し始めるので、調査が進みません。このチョウは食草にも謎が多く、現在鹿児島昆虫同好会のメンバーが取り組んでいます。

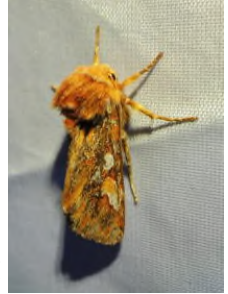
4月15日に高千穂河原駐車場で灯火採集をした際には、マツキリガが飛来しました。本種は幼虫がマツ類を食べ、サナギで越冬しま

すが、やはり春先にしか見られません。

霧島の昆虫数は、1969年の総合調査で1293種と報告されましたが、様々な時期を、いろいろな視点で調査をすればもっと多くの種類が生息していると考えられます。

2011年1月26日に起こった新燃岳噴火の直後に、「噴火によって、霧島の生きものはどのように変わのでしょうか？」という質問が博物館に寄せられました。しかし、私たちは今までの霧島についてあまり情報を持っておらず、対応できませんでした。

2012年に入山規制が火口から2 kmに縮小されたのを機会に、霧島の昆虫調査を計画し、2013年から環境省の調査許可を受けました。これから数年かけて霧島の昆虫、特に新燃岳噴火の影響に注目し、調査を継続しようと思います。



マツキリガ

鹿児島の地質32かごしま化石発見伝

～小さな化石が威力を発揮する

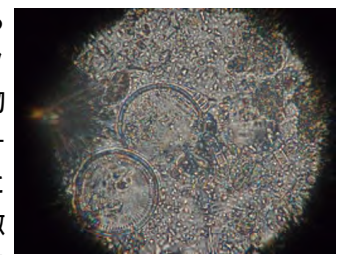
地質担当 鈴木 敏之

先日、薩摩川内市下甕島の姫浦層群からケラトプス類（草食恐竜）の歯根化石が発見され、話題になりました。現在の化石研究では、生物のからだの一部分であっても条件がそろい決定的な根拠が見つければ、化石の種類や大きさなどの特徴を推定することが可能な場合もあります。下甕島では、以前に見つかった獣脚類（肉食恐竜）化石やその後の集中発掘会で見つかった他の化石などから、この地域には白亜紀の多様な生物が存在していたことが裏付けられました。調査や研究がさらに進めば、当時の新たな様子がよりはっきりとわかるかもしれません。

一方、化石が含まれていないように見える堆積岩からなる地層や岩石の中にも小さな化石が含まれる場合があります。顕微鏡を使ってやっと識別できるような微小な化石でこれらを微化石とよんでいます。化石がめったに産出しない深い海底に堆積した地層には微生物の遺がい（微化石）が含まれ、これらを調

べることにより、その当時の堆積環境や地球全体の環境に関する情報を得ることが出来ます。

現在知られている微化石は、プランクトンなどの微生物と、多細胞生物の一部分（花粉など）とに大別されます。微生物では主に放散虫などの珪酸質や有孔虫などの石灰質といった硬質部分が微化石として残ります。



泥岩中の珪藻化石

これまで阿久根市から薩摩川内市にかけて見られる地層は古生代のものと考えられていましたが、放散虫化石の発見と研究により、それより新しい中生代三畳紀～ジュラ紀に堆積したことが明らかになりました。とても小さな化石ですが、これまではっきりしなかった事実を教えてくれるケースです。